

「弥生時代における金属器等の謎について」

はじめに

かつては、弥生時代の指標（目印）が「弥生土器」であり弥生時代の開始は紀元前300年頃と言われていた。そして水田稲作と金属器（青銅器・鉄器）がほぼ同時に伝来したと述べられていた。

その後、指標が「水田稲作の開始」へ変更し、かつ、弥生時代の開始が紀元前10世紀（紀元前8世紀説あり）と遡ったのである。これは2003年（平成15）、国立歴史民俗博物館の研究チームが水田稲作開始期の土器についていたスズなどを炭素14年代測定した結果、紀元前10世紀の可能性があると発表したことによる。なお、金属器の出現は紀元前4世紀以降で変わらない。

これにより①弥生時代の前半（紀元前10世紀～紀元前5世紀）は「新石器弥生文化」であり、②後半（紀元前4世紀頃以降）は「金属器弥生文化（一部金石併用）」となった。

私見としては弥生時代前半の新石器弥生文化を「水田稲作時代」とし、後半の金属器弥生時代を「金属器時代」と区分すべきと提唱するものである。

弥生時代を理解しやすくするために「弥生時代区分表」を表示するものである。

表1 弥生時代区分表（藤尾慎一郎著書『弥生時代の歴史』から加工作成）

区 分	西 暦	指標・その他
早期前半	前10世紀後半～前9世紀中頃	水田稲作の始まり
早期後半～前期後半	前9世紀～前5世紀	農耕社会の成立と水田稲作の拡散
前期末～中期前半	前4世紀～前3世紀	金属器の登場
中期後半～中期末	前2世紀～1世紀	文明との接触とクニの成立
後 期	1世紀～3世紀	古墳時代への道

1 新石器弥生文化の変革事象

○ ①と②は、早期前半（紀元前10世紀後半～紀元前9世紀中頃）

○ ③と④は、早期後半～前期後半（紀元前9世紀～紀元前5世紀）

① **水田稲作（灌漑稲作）の始まり**〔九州（早期～）から東北北部〔前・中期〕まで及ぶ〕

② **宗教の変革** 縄文時代の精霊信仰（アニミズム）に加え、稲の豊穰を祈る穀物信仰と祖霊信仰が主なものになった。

③ **環壕集落**（北部九州（早期～）から関東・北陸北部（中期中頃～）まで

水田稲作の農耕社会は共同作業が多いため、集まって暮らすようになる。そして「ムラ」と呼ばれる集落が誕生し、弥生時代中期には集落をまとめる首長（リーダー）が誕生する。やがて土地や水争い食料を巡る争い等により集落同士の争いが生じると環壕集落が現れる。

環壕集落とは 村の周囲に壕（ごう）を巡らせた集落のこと。一般的に敵の侵入を防ぐための防御施設と言われるが、その他の説がある。

【事例】●「福岡市那珂（なか）遺跡」、「福岡市板付（いたづけ）遺跡」（紀元前9世紀）⇒ 内部の削平激しく住居跡見つからず。

●「佐賀県吉野ヶ里遺跡」（紀元前7世紀）⇒ 内部に住居跡見つかった最も古い例

謎 水田稲作をしても環壕集落がない地域がある。東北地方と茨城県・栃木県である。何故だろうか。藤尾慎一郎氏は社会的・経済的な地域の核でなかったからと述べる。

私見 そうであろうか。環壕集落を必要性の裏返しではないか。例えば、防御等の必要性がなくなったことなど。

④ 戦い〔北部九州で顕著。中期後半以後は中部以西に認められる〕

【事例】紀元前9世紀後半、「福岡県新町（しんまち）遺跡」で支石墓の内部から朝鮮系磨製石鏃を大腿骨に打ち込まれて死亡した40代男性（縄文人系）が見つかった。最も古い戦いの証拠である。弥生時代前期後葉頃の西摂地域（現兵庫県神戸市）にある「新方（しんぼう）遺跡」から合計13体の人骨が発見された。その内の1体には17本の石鏃が刺さっていた。

謎 何故、朝鮮半島から伝来した支石墓に縄文人が埋葬されていたのか。

私見 糸島平野から西は支石墓、福岡平野から宗像地方は木棺墓や石槨墓が分布する。これまで確認されている支石墓の被葬者は縄文人の形質を残すと古代史学者の中村大介氏は述べる。

支石墓とは 新石器時代末から初期鉄器時代にかけて世界的に分布した巨石墳墓の一種。数個の石の上に大石を載せた墓である。中国や朝鮮半島、日本にもみられる。日本では縄文時代後期から弥生時代前期・中期にかけて九州北部を中心に分布している。（HP・Search Labs から引用）

謎 縄文時代には戦争はなかったか？

従来、縄文時代は個人的な争いによる殺傷は散見されるが、組織的な戦闘（戦争）はなかったとされてきた。ところが令和2年（2020）、北海道伊達市の有珠（うす）モシリ遺跡から11体の人骨（10台後半から成人のもので男性10体、女性1体）が発見された。令和4年（2022）になり11体の人骨を精査したところ8体に石斧や鈍器によるものの痕があり、そのうちの5体は致命傷であった。また、人骨は約2400～2500年前のものだと判明した。某歴史学者は、「平和」という縄文時代のイメージは覆りつつあると述べている。しかし私は、人骨は紀元前4世紀～前5世紀のものであり、その時すでに紀元前10世紀には本州、四国、九州は弥生時代になっている。確かに北海道は水田稲作が出来ないので弥生時代はない。縄文時代続いて続縄文時代（紀元前3世紀から紀元後7世紀まで）である。しかし北海道の縄文人、続縄文人は弥生人と交易をしていたし、生活も従来の縄文人の生活環境とは変化している。これをもって縄文時代にも戦いがあった根拠とするのはおかしい。

⑤ **社会的格差の登場** 「福岡市雑餉隈（ざっしょのくま）遺跡」の有力者の墓から丹塗（にぬり）磨研壺、磨製石剣、磨製石鏃が副葬品として出土した。これは当時の朝鮮半島南部の有力者と共通するものである。また、副葬品を持つ子どもと、持たない子供の墓が現れて有力者の子供も特別扱いされていたことが判明した。

⑥ **クニの成立** 農耕社会が進展すると人口及び集落数が増大し、環壕集落を中心としたクニ（集落群）が成立する。クニは各地につくられた。やがて居住区、工房、祭殿などを伴った中核的大規模環壕集落が出現するようになる。『魏志倭人伝（魏書東夷伝倭人）』では、倭国はもと百余国、今三十国であり、末盧（まつら）国（四千余戸）、奴（な）国（二万余国）、伊都（いと）国（千余

戸)などが記されている。

2 金属器弥生時代(青銅器)の特色について

(1) 世界および東アジアの歴史区分

世界史の歴史区分では「石器時代」、「青銅器時代」、「鉄器時代」と三時期法区分(主に使用されていた道具の材料から)とする。

メソポタミア(イラクの一部)・エジプトでは紀元前3000年頃から青銅器時代が始まる。オリエント(中近東)においてはヒッタイト(トルコの一部)の現れる紀元前1500年前後までが青銅器時代である。そして、ヒッタイトが滅亡する紀元前1190年頃ヨーロッパ、オリエント(中近東)全域に鉄器が広がる。

中国では紀元前3100年頃から紀元前2700年頃の黄河最上流部に栄えた馬家窯(ばかよう)文化において青銅の物品が発見されている。そして春秋時代(紀元前770年～紀元前400年頃)まで青銅器が使われた。しかし、西洋では青銅器を利器(武器)として使ったが、中国を中心とする東アジアでは祭器として祭りに使われた。(但し、出現期には利器として使用)。なお、中国の歴史区分では青銅器時代はない。

また韓国では、かつて「無文土器時代」と呼んでいた紀元前7世紀頃から紀元前3世紀頃までを、現在は「青銅器時代」と区分している。その後、「初期鉄器時代」、「鉄器時代」となる。

ところで、日本では青銅器時代区分はない。農具や工具といった実用具に青銅がほぼ採用されていないからという。実用具の金属器は鉄器が出現してからである。

HP 国史大辞典・世界大百科事典 青銅器 「鉄は固くて加工しやすいため、もっぱら工具や農具、武器などとして使われましたが、青銅は鉄に比べて強度で劣りました。そのため実用品ではなく主に祭器として使われたのです。青銅は強度で鉄に劣るが、加工性に優れ、鉄より錆びにくい。」

(2) 日本の青銅器文化

福岡県今川遺跡から発見された紀元前8世紀の「銅ノミ」は弥生時代最古の青銅器である。これは中国東北部で作成された遼寧式(りょうねいしき)銅剣の破片を再加工したものといわれる。

その後、紀元前4世紀頃になり北九州の有力者達の墓から副葬品として青銅器武器が出土する。初期の武器形青銅器の中には朝鮮半島南部製より大きい「中細形」があり国産と思われる。

【事例】福岡市の吉武高木遺跡の三号木棺墓から細形銅剣2点、細形銅戈(どうか)1点、細形銅矛(どうほこ)1点、さらに多鈕細文鏡、(たちゅうさいもんきょう)ヒスイ製勾玉(まがたま)1点、碧玉製管玉(へきぎよくせいくがたま)多数が発見。これは、三種の神器が見つかった最古の例である。朝鮮半島製である。

国産青銅器を作った工房の1つである熊本市内八ノ坪遺跡がみつかった。前3世紀前葉のもので鋳型(いがた)などが出土した。作られた青銅器は、朝鮮式小銅鐸1点、細形銅剣3点、銅矛1点、不明2点である。

福岡県有田遺跡の甕棺から細形銅戈が出土した。この銅戈は柄の接合部分が劣弱であるから国産品である。中期初頭の最末期には北部九州で青銅器武器を生産し始めていると考えられる。

日本列島では古墳時代終末期まで日本列島産の銅を利用していない。すべて輸入に頼っていた。鉛同位体比分析によると朝鮮半島産、華北産および遼東産である。中期初頭導入の細形銅剣は朝

鮮半島のものと異なることから国産を考える見解もあるが搬入品であろう。

続日本書記 元明天皇 和銅元年（708）春正月十一日、「武蔵の国秩父郡が和銅を献じた。」

鉛同位体比分析とは ⇒ 青銅の主成分は銅と錫である。さらに融点を下げるために鉛を添加する。鉛同位体比分析は、地域ごともしくは鉱床ごとに含まれる鉛の同位体に差異があることを利用して、鉛を含む製品の産地を知る方法である。銅、錫、鉛がそれぞれ別の産地のものを融解した場合は量比からして鉛の産地となる可能性が高い。

中期の北部九州では銅鏡と共に武器型青銅器は威信財として個人に帰属し甕棺に副葬される。

これに対し、近畿の銅鐸は農耕祭祀、宗教的儀礼具として集団に帰属し、集落ないし集落群に保有される。

（3）青銅器時代の変革事象

① 有力者の顕在化

弥生時代中期初頭（紀元前3世紀）になると 北九州の板付田端遺跡、吉武高木遺跡等で青銅器を複数有する被葬者が現れた。武器は細形銅剣、細形銅矛（どうほこ）、細形銅戈（どうか）、祭器は多鈕細文鏡（たちゅうさいもんきょう）でセットされ、細形銅剣が最も多く副葬されている。それまで武器の副葬自体がまれであったが、この時期から青銅器武器が突然、有力者のシンボルになったのである。

② 宗教の変革

ア 青銅器信仰

農耕の安定化により地域社会がより連帯感を強めた際、地域で共通のシンボルが求められようになる。このような状況の中で石器や土器しか知らなかった人々にとり美しく黄金色に輝く青銅器は、人々の心を引き付け信仰のシンボルとなったのである。

イ 銅矛・銅剣文化圏と銅鐸文化圏

戦前に哲学者和辻哲郎氏が北部九州「銅鉾銅剣文化圏」と近畿地方「銅鐸文化圏」との政治的対立を主張した。特定地域が特定器種の青銅器を保有することについて、今日では青銅器の地域差は政治的対立よりも祭祀シンボルの差異として考えられている。さらに最近では各分布圏内に他の銅器も出土されることから再検討が求められている。

私見 確かに各分布圏内に他の銅器が出土したことの意味は吟味すべきである。しかし表2の島根県出土の青銅器、出土数の比率をみると、例えば荒神谷遺跡では銅剣が358点に対して銅鐸は6点である。逆に加茂岩倉遺跡は銅鐸39点に比して武器型青銅器はない。これから考えると根本的に考えを改める必要はない。従来の「銅矛銅剣文化圏」と近畿地方「銅鐸文化圏」はおおよそ正しいのではなだろうか。

謎 どうしてそのような青銅器の文化圏が形成されたのであろうか。仮に祭祀によるグループ（圏）としても、どうしてそのように形成されたかの説明がない。私は交易ルートの違いから祭祀の違いとなり、かつそれは緩やかではあるが政治的グループ（圏）の違いでもある三重の圏と考える。

謎 何故、北部九州は「銅鉾銅剣」を、そして近畿地方は「銅鐸」をシンボルとしたのか。

北部九州では主に銅矛（ほこ）・銅戈（か）という武器型青銅器が鑄造された。他方、近畿地方は主に銅鐸を鑄造した。しかも、北部九州は朝鮮半島と同じ型式が再現されるのに対し、近畿

地方では朝鮮式銅鐸が大型となる。以上のように北部九州は朝鮮半島に地理的に近く、また渡来弥生人も多かったことから朝鮮半島と同じ形式を尊び銅剣、銅矛の武器形青銅器をシンボルとした。一方近畿は青銅器を尊重したが、北部九州とは異なり音のする銅鐸に魅了されたからである。

表2 島根県出土の青銅器（島根県立古代出雲歴史博物館展示ガイド一部加工）

地域	遺跡	銅鐸	銅剣	銅矛	銅戈
出雲	加茂岩倉遺跡	39			
	荒神谷遺跡	6	358	16	
	志谷奥遺跡	2	6		
	その他	6	2		1
石見		4			1
隠岐			1		
島根県教育委員会所蔵			1		
合計		57	368	16	2

○ 埋納（まいのう）

埋納には何らかの決まりごとがあったことまでは言えるが、具体的な決まりごとは判明しない。

謎 青銅器シンボルは何故急に使用されなくなったのか。

私見 青銅器をシンボルとする祭りの代わりに新たなシンボルが誕生したからではないか説に賛成である。なお、「日本の鉄器」で再度説明する。

謎 銅鐸は埋納と呼ばれ何らかの目的をもって意図的に埋められている。この理由を『島根県立古代出雲歴史博物館展示ガイド』では以下4説を記載している。

- ①土中（どちゅう）保管説 ⇒ 普段から土の中で保管していて、そのまま残された。
- ②隠匿（いんとく）説 ⇒ 有事の際に奪われたり壊されたりしないよう土中に隠した。
- ③地鎮説（じちん）説 ⇒ 地の神への捧げものとして埋めた。
- ④境界説 ⇒ 邪気や悪霊をはらうため、自分たちの土地の境に埋めた。

また、青銅器シンボルが埋められた場所は以下の通りである。

- ①見通しの悪い山の斜面 ⇒ 荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡
- ②見晴らしの良い山の斜面 ⇒ 滋賀県野洲市小篠原遺跡
- ③集落周辺の開けた場所 ⇒ 集落内の一角（大阪府八尾市跡部（跡部）遺跡など）や方形周溝墓の墓域内（奈良県桜井市大福遺跡など）

私見 上記の4説は、いずれの説も廃棄されるという前提が考慮されていないので賛成しかねる。新たなシンボルの出現により青銅器は不要になったが、そのまま廃棄するとタタリが恐ろしいので土中に埋めたのではないか。（タタリ封じ込め説）

3 金属器弥生時代（鉄器）の特色について

(1) 世界における鉄の始まり

人類最初の鉄は紀元前4000年後半、エジプトで発見された鉄片を丸めたビーズである。さらに紀元前3000年後半には、トルコ中央部のアラジャホユックの王墓から鉄剣が発見された。

これらは隕石から出来ている隕鉄であり鉄鉱石を製錬して作ったものではない。

紀元前2000紀に入ると隕鉄でない鉄製品が現れる。アジェムホユック遺跡（トルコ）から象牙製で貴石が散りばめられた小箱が出現したが、鉄は金や宝石などと同じく装飾として使用されていた。そして、紀元前1430年以降、特に後半（紀元前13世紀）では装飾品だけでなく、短剣、槍先、ナイフなどの利器が現れる。ヒッタイト帝国時代はほとんど鉄製品が見られず、鉄器が日常的に使用されるのは紀元前8世紀以降との見解がある。鉄器時代がいつ、どこで始まったのかは現在も不明といわれる。

鉄器は青銅器と異なり、農作業に用いる鋤（くわ）や鋤（スキ）の刃先につける鋤先や鋤先、鉄鎌、鉄の斧、工具の刀子（トウス）、ノミ、ヤリガンナそして武器である鉄剣、や鉄矛など、さまざまな利器として使われる。

また、鉄は炭素量の違いで性質が異なる。炭素量が2%以上含まれる鉄は鑄鉄（ちゅうてつ）と呼ばれ、硬いがもろいという性質があるので利器には向かない。鑄鉄から作られた鉄器を鑄造鉄器という。紀元前3世紀になると炭素量が2%以下となる鍛鉄（鋼・はがね）が作られる。軟らかく粘りがあり利器に適している。鍛鉄から作られた鉄器を鍛造鉄器という。

(2) 東アジアの国際情勢と鉄器

紀元前3世紀、中国戦国時代七雄の一つである「燕（えん）」が朝鮮半島北部を領有している時代に、朝鮮半島で鉄が作られはじめ日本にも少しずつ伝わって来た。紀元前194年、燕の衛満（えいまん）が朝鮮北部に「衛氏朝鮮」を建国する。そして紀元前108年に漢の第7代皇帝の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼし、鉄資源を収奪した。これについて、司馬遷の『史記』では武帝の朝鮮出征を正当化する一方、朝鮮に非がないのに侵攻したと述べている。武帝は同年、朝鮮半島に4つの植民地（または直轄地）である楽浪郡、玄菟（げんと）郡、真蕃（しんばん）郡、臨屯（りんとうん）郡を設けた。そして、鉄鉱石を掘り出し鉄の生産をはじめたのである。朝鮮半島産の鉄は、漢が国家の統制下におき、原則漢国内では専売品として輸出した。また、周辺の国に対しては土産物として与え恭順させたところである。

秦、漢の時代の地理誌である『山海経（せんがいきょう）』に「倭は燕に属していた」と書かれており、日本は朝鮮半島から鉄（鉄製品）を舟で海岸線に沿って運んでいたと思われる。

(3) 日本の鉄器

日本最古の鉄器は、紀元前5世紀頃につくられた燕製の鉄斧（てっぷ）である。愛媛県大久保遺跡から出土する。弥生人は斧の破片の割れ口を砥石で研いで小型のノミなどの工具として再利用していた。なお、前4世紀前葉から鉄器が使用されるようになったといっても、木の伐採や切断、加工など、ほとんどの作業は石器で行われていた。従って破片の破面に刃を研ぎ出してノミなどに再加工された小鉄器で木製容器を加工する際に限定的に使っていたのが現状である。

日本最古の鍛造鉄器は紀元前3世紀、佐賀県吉野ヶ里遺跡の甕棺に副葬されていた鎌のような鉄器である。なお、同時代になると熊本市の八ノ坪遺跡では青銅器の国産化が始まっているので、

鉄器も国産化していたと考えられる。原料はいずれも朝鮮半島のもので、日本で鉄鉱石を原料に製鉄が始まるのは6世紀後半の岡山からである。

倭人が鉄素材を得ようと思って朝鮮半島南部（弁辰地区）を訪れても自由に入手できるものではない。鉄素材を手に入れるためには楽浪・帯方郡の承認が必要である。その承認を得るために朝貢が頻繁に行われていたのである。

謎 紀元後2世紀以降、鉄素材や鉄器と中国鏡の分布が大きく異なることとなった。すなわち玄界灘沿岸諸国（九州北西部）の首長にとって肝要なのは生産力を保証する鉄素材や鉄器などの確保と流通であり、中国鏡などの威信財は伊都国を除き関心がなくなった。一方、近畿を中心とする東方地域はいまだに中国鏡などの威信財を重要視し必要としていたのである。

私見 玄界灘沿岸諸国は朝鮮半島に近く東アジアの情報が入りやすいので、現実主義になっていたが、近畿は遠いため古い価値判断のままであったからである。

謎 青銅器時代の変革事象で「青銅器シンボルは何故急に使用されなくなったのか。」について説明したが、1世紀後半から2世紀初めにかけて青銅器シンボルを祭祀とすることに変化が生じていた。具体的には吉備や山陰が銅鐸祭祀を取りやめて、代わりに墳丘上で特殊器台や特殊壺による祭祀となった。山陰は四隅突出型墳丘墓上での祭祀とすることにした。

私見 吉備や山陰は日本海側の交易コースがあり、東アジアの情報を得たから変わったのであろう。他方、北部九州と近畿は従来通り青銅器シンボル（銅鐸、銅矛・銅剣）の祭祀を行っていた。

謎 前方後円墳が奈良盆地東南部に完成したのは何故であろうか。奈良に前方後円墳が出来た各説を紹介してみる。**1つは無主の地**（所有者が定まっていない土地）だから。**2は邪馬台国の所在地**で祭祀・政治の中心であったから。**3つは日本列島の中央**であり、物資の交流ネットワークを主導出来たからとある。

私見 3番目の物資の交流ネットワークを主導出来たが可能性が高いと考える。そして、単に日本列島の中央だけでなく、日本海と川で繋がっていて交通網も完備しているからではないか。

謎 3世紀になっても近畿中央部（大阪や奈良など）の鉄器の出土量は相変わらず低い。（表3地域別鉄器出土表参照）近畿中央部に鉄器が見つからない理由としてはリサイクル説、埋蔵中に腐ってなくなった説などがある。

私見 理由としては、その他発掘が少ないから、墓地に副葬する習慣がないなどもあったが、現在では近畿では鉄器が少ないことが明確となった（表3参照）。

同時代には北部九州が鉄器生産の中心であり生産・経済の中心となる。他方、近畿では少ない鉄器のうえに更に後期になり石器も減少する。このため生産活動に支障がでるし軍事力も貧弱である。しかるに弥生時代に続く古墳時代では近畿が政治の中心となったのは何故だろうか。

1説は多くの古代史学者・研究者は、生産もなく軍事力もない近畿が主導権を握ったのは宗教の力によるものだと考えている。

2説は『日本書紀』の神武天皇東遷にヒント得て、北部九州と近畿が話し合いした妥協の産物として、王は北部九州から出し、王の居住地は近畿とするというものである。

3説は前方後円墳が奈良盆地東南部に完成した理由の「物質の交流ネットワークを主導できた」からである。

私見 **1説**は邪馬台国近畿説を想定し、奈良県の纏向遺跡が邪馬台国であり、そこに卑弥呼がい

るから経済力もなく、軍事力もない近畿が宗教の力で主導権を握ったということであろう。

しかし、そうであろうか。以下の理由からおかしいと考える。①まだ邪馬台国が近畿で確定しているわけでもない。②北九州と近畿では青銅器シンボルが異なるのに宗教の力で妥協出来たのであろうか。③経済、軍事力が強大な九州が宗教統一で妥協するであろうか。④『魏志倭人伝』には「卑弥呼は夫なく、男弟あり国を佐治す」とある。祭事を司る卑弥呼と政治権・軍事権を持つ弟との祭政二重主権である。したがって卑弥呼は女王であるが一切世俗的な政治とは無関係で専ら祭事を司ったのである。よって宗教の力で北九州を抑えて近畿が主導権を握ることは出来ないと考えられる。⑤古墳時代になると祭政二重主権がなくなるが、いつ、どのように無くなったのであろうか。説明が出来ない。

2説であるが、『日本書紀』に出てくる神武天皇東遷の一字一句が正しいとは思えない。だが、九州から王族がやって来たのかすかな記憶から『日本書紀』に記載された可能性はありうろと思う。また、分子人類学者の篠田謙一氏の著書『新版 日本人になった祖先たち』では、DNAの分析から北部九州の弥生人の集団が、水田稲作の拡大に伴い東進を開始し東北地方まで進んだと記載されている。そうだとすると2説の可能性は全くないとは言えない。ただし、確定的な根拠がないのが弱いところである。

3説の可能性が一番あるのではないか。

表3 地域別鉄器出土表 (奥野正男氏の県別鉄器出土表を一部加工)

	鉄刀	鉄剣	鉄矛	鉄戈	鉄鏃	武器計	工具・他	合計
九州	32	76	16	20	147	291	597	888
中国	1				11	12	56	68
四国		1			5	6	53	59
近畿	1	1			19	21	15	36
その他								0
合計	34	78	16	20	182	330	721	1051

3 むすびに

弥生時代の金属器等に関しては謎が多い。そこで今回はその解明に取り組んでみた。根拠が有るものについては何とか推理が出来たと思う。私見についての正否については皆さんに委ねることとする。なお、根拠が見つからないものについては依然として謎のままである。皆さんに解明を託すこととする。

参考文献

- 『倭人と鉄の考古学』 村上恭通著 青木書店 2003年9月30日発行
『邪馬台国と狗奴国と鉄』 菊池秀夫著 彩流社 2012年5月25日発行
『古代史の謎は「鉄」で解ける』 長野正孝著 PHP新書 2015年10月30日発行

- 『弥生時代の歴史』 藤尾慎一郎著 講談社現代新書 2015年8月20日発行
- 『日本の先史時代』 藤尾慎一郎著 中公新書 2021年9月5日発行
- 『日本人の起源』 編集長本多秀臣 (株) 洋泉社 2018年7月発行
- 『青銅器が変えた弥生社会』 中村大介著 吉川弘文館 2024年8月発行
- 『古代日本の青銅器の原料産地を訪ねて』 平尾良光著 計測と制御 Vol128 1989年8月発行
- 『弥生時代における鉄器保有の一様相』 野島 永氏 2009年9月第58回埋蔵文化財研究集会
(兵庫県立考古博物館) において発表要旨を集約
- 『鉛同位体比から見た弥生年代論』 新井 宏氏 2014年1月「トンボの眼」講演会(豊島区立生活産
業プラザ) において講演要旨を集約
- 『農耕社会の成立』 石川日出志著 岩波新書 2010年12月15日発行
- 『ヒッタイト帝国』 津本英利著 PHP 新書 2023年11月29日発行
- 『島根県立古代出雲歴史博物館展示ガイド』 ハーベスト出版2018年12月1日発行